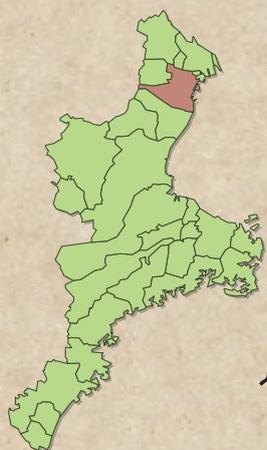


よっかいち 四日市市



- ① 四日市萬古焼
- ② お茶栽培(伊勢茶)
- ③ 四日市祭
- ④ 稲葉三右衛門
- ⑤ 四日市港
- ⑥ 東海道とお土産
- ⑦ 石油化学コンビナート

伝統工芸

四日市市

ばんこやき 四日市萬古焼

萬古焼は四日市市の地場産業で、「国の伝統的工芸品」にも指定されていて、急須や土鍋の生産で有名です。

特に、土鍋の生産高は国内の7割以上を占めていて、耐熱性に優れているのが特徴です。また、急須では、紫泥急須が四日市萬古焼のシンボリック的存在となっています。

四日市萬古焼の歴史は、山中忠左衛門から始まります。忠左衛門は、それまでの萬古焼(朝日町の森有節が考案した有節萬古【→P22】)を10数年研究しました。当時、有節萬古をつくる方法や技術は秘密になっていたため、その技術を身につけることは困難だったのです。しかし、1870(明治3)年に本格的に萬古焼を作り出すことができました。そして、自分が得た技術を地域の人々に教え、萬古焼を発展させました。その後、水谷寅次郎が半磁器の製造技術を開発したことで、さらに発展しました。半磁器は原料の土生地の半分が土、もう半分が石から成っており、温かみのある製品になっています。

萬古焼は、全国に流通しているだけでなく、四日市港から海外へもたくさん輸出されています。



急須

【→P111*51、*52】

■ 萬古焼のさまざまな作品や製品を調べてみましょう。

特産物

四日市市

さいばい
お茶栽培(伊勢茶)

三重県で生産されたお茶のことを「伊勢茶」といいます。【→P37、50】

三重県は、茶の栽培面積・生産量・生産額ともに、静岡県、鹿児島県について全国第3位(2008年度)です。

四日市市の水沢地区では、かぶせ茶の生産が盛んです。お茶の葉の新芽に黒い覆い(寒冷紗)をかぶせて、直射日光をさえぎる方法でつくられます。まろやかなうまみをもった味が特徴で、付加価値のあるお茶といえます。

また、伊勢茶は他産地のお茶の原料用茶として出荷されることが多く、「伊勢茶」として販売している割合は、18.5%(2004年度)です。このことから、伊勢茶をブランドにする取り組みも進められ、2007(平成19)年に特許庁の地域団体商標に伊勢茶が認定登録されました。【→P87】



水沢地区のお茶畑(四日市農業センター提供)

【→P111*33】

- お茶づくり(栽培や加工)の工夫について調べてみましょう。

祭り

四日市市

四日市祭

四日市祭は、諏訪神社の例祭(毎年7月27日)として行われてきました。江戸初期にはすでに行われ、回を重ねるごとに、各町の練物が増え、江戸時代後半には祭りの形が整ったようです。明治になると、祭りは9月25日～27日に行われるようになりました。合計30もの練物(大型の山車4台、小型の山車14台、鯨船山車3台、釣物4組、大名行列2組、その他練り物3組)がそろい、東海地方でも有数の祭りとなり、「東海の三大祭り」「日本の奇祭」ともよばれていました。

しかし、戦災によって大半の山車や練物は焼失してしまいました。戦後は、戦時中疎開して残った鯨船(明神丸)や大入道などが徐々に復活しました。やがて1964(昭和39)年からは、8月の第1日曜日を中心に催される「大四日市まつり」にこれらの山車や練り物が登場しました。

近年では、復元された山車もいくつか登場し、秋の祭りも復活しています。



大入道(四日市市立博物館提供)

【→P111*62】

- あなたの住んでいる地域に残る山車にはどんなものがあるか、調べてみましょう。

人物

四日市市

いなばさん えもん
稲葉三右衛門

稲葉三右衛門は、江戸時代末から明治時代初期に、港の維持と修築に苦心をし、四日市港が発展するきっかけをつくりました。

古くからあった港は、江戸時代の末の「安政の大地震」(1854年)で被害を受け、次第に船の出入りができないようになってきました。それでも1870(明治3)年には、四日市-東京の定期航路ができ、蒸気船が来るようになりました。それを見た稲葉三右衛門は、これからは蒸気船の時代になる、四日市の発展のために大きな船が出入りできる港にしたいと考えました。そこで、新たに運河を掘って海を埋め立て、築港工事をしようと計画したのです。

1873(明治6)年に県から許可があり、同年には自分の土地から工事を始めました。1874(明治7)年に埋め立て地と運河はできあがったものの、資金がなくなり工事を中断しました。1875(明治8)年に県が工事を引き継ぎましたが、これも中断しました。この間、三右衛門は資金調達に苦心しつつ工事の継続を願い出て、やっと1881(明治14)年に認められ、1884(明治17)年に工事は完了しました。



肖像画(四日市市立博物館提供)

【→P111*61】

▪ その後、四日市港の築港のために活躍した人々と、その仕事の内容について調べてみましょう。

産業

四日市市

四日市港

四日市港は、全国に23ある、「特定重要港湾」の一つです。日本の国際海上輸送網の拠点として、特に重要な港です。さらに、スーパー中核港湾にも指定され、国際コンテナ輸送でも重要な港です。

霞ヶ浦の埠頭には、巨大なクレーン「ガントリークレーン」が目につきます。短時間でたくさんのコンテナを積み下ろすことができます。また、コンテナターミナル、モータープール(新車を船に乗せるための広い駐車場)、石炭の貯炭場などがあります。第1、第2、第3埠頭では、穀物サイロや穀物専用の大きな機械や倉庫があります。

このほか、服部長七により修築された旧港の潮吹き防波堤、運河にかかる末広橋梁(跳上橋)などの近代化遺産もあり、国の重要文化財になっています。



霞ヶ浦地区のコンテナターミナル(四日市港管理組合提供)

【→P111*61】

▪ 四日市港の輸出入品について調べてみましょう。

歴史

四日市市

みやげ
東海道とお土産

文献の中ではじめて四日市の名前が登場するのは、室町時代です。1473(文明5)年の外宮庁宣には「四ヶ市庭浦」と書かれています。このことから当時の四日市は、「市庭=市場」と「浦=湊」の発達した町だったことがわかります。

四日市は、江戸時代には東海道43番目の宿場町として栄えました。1843(天保14)年には1811軒の家々が建ち並び、そのうち旅籠98軒、本陣2軒、脇本陣1軒で、人口7114人という、東海道の中でも有数の宿場町になっていました。また、四日市湊(現在の四日市港)は、熱田との間の「十里の渡し」として利用されました。さらに、富田と日永は「間の宿」として栄えました。富田は名物の焼蛤を売る店が軒を連らね、日永は東海道と伊勢街道(参宮街道)の分岐点として栄えました。東海道の道筋には、旅人をもてなす店がありました。

四日市のお土産としては、なが餅、日永うちわなどが有名です。なが餅は平たく細長い形の餅です。日永うちわは丸い竹を使った「丸柄」が特徴で、京うちわ、丸亀うちわと並んで全国的に有名で、お伊勢参りのお土産として人気がありました。



四日市・広重の浮世絵(四日市市立博物館提供)

【→P111*62】

- 三重県内の風物を描いた浮世絵や伊勢参宮名所図絵などについて調べてみましょう。

産業

四日市市

石油化学コンビナート

四日市市の臨海部には、赤白の高い煙突が何本も立っています。そこが石油化学コンビナートの工場がある場所です。

石油化学コンビナートでは、原油からさまざまな成分を取り出して製品をつくっています。その主な流れは、原油(石油)→ナフサ→エチレン→中間製品→製品です。このようにして私たちの身のまわりにある多くのものが石油からつくられています。例えば、「ポリエチレンの袋」は、「原油からナフサを取り出す工場→エチレンをつくる工場→ポリエチレンをつくる工場→ポリエチレンの袋をつくる工場」という流れでできたものです。各工場は、つくったものを送るため、パイプでつながっています。

1960(昭和35)年頃から、大気汚染や水質汚濁などの公害がおこりました。住民の間で「四日市ぜんそく」の患者が増え、裁判になりましたが、工場は環境対策を重ね、四日市の空気や水は次第によくなりました。現在ではその対策を外国から学びに来るほどになっています。



四日市の石油精製工場

- 身のまわりの多くのものは、石油からつくられています。石油からつくられた製品にはどのようなものがあるか、調べてみましょう。